『語意考』研究

土屋博次

一　賀茂真淵略伝

『語意考』の著者は賀茂真淵である。『国学者伝記集成』によれば、彼の生涯は次の通りである。

彼は元禄十年（一六九七）三月四日、遠江国敷智郡岡部で、神職岡部定信の次男として生まれた。呼名ははじめ参四、後に衛士と改める。実名は政信、又政藤と名乗った。幼少にして姉聟政盛の養子となった。ところで、『玉襷』には次のようにある。

呼名を荘助、また参四と云ひ、実名を始め春栖または政躬と名告られ、また此後政藤と改められたり。

享保八年（一七二三）、名を政成と改め、養家を退いて僧侶となろうとするも果せず、梅谷甚三郎なるものの聟養子となった。『玉襷』には、一子をもうけたのち、安右衛門政長の養子となった旨、記載されている。

享保一八年（一七三三）、三十六歳の時、友人杉浦信濃守国顕のすすめで上京し、荷田春満の弟子となった。この後、政成を真淵と改めた。生国の敷智（フチ）郡の名称から思いついたものだという。村田春海の『斎明紀童謡序』には次のようにある。

（荷田春満は）いにしへの学びに、心ふかからん人のいで来んを、待ちて伝ふべしとて、こゝろにひめおかれつるを、よはひのすゑにいたりて、賀茂の翁が、よろづ、きはことにすぐれたる事をこゝろにしりて、今はこをつたへん人は、いましひとりにこそあれ。いましこそ、つひに学びの年月つもりなば、我思ひ得たるが、ことぐ〳〵によみ得べき人なれとて、翁になん、口づから伝へたまひにけるとぞ。（（　）内筆者注）

春満は真淵の才能を認め、荷田家の奥儀を口伝したという内容がのべられている。

元文元年（一七三六）、師春満が世を去った。師事した四年間に真淵は彼の学問を余すところなく継承したと言われている。

大人、かく荷田の翁に事へ給ひしは、わづか四年の間なりしか

ど、学問の道には、素より凡ならず。智に深くおはせるが故に荷田の門の人も多かりと聞ゆる中に、一人ぬけ出て、その正意をば得られてぞ有りける。其は荷田の門に大人をおきて外に大人の如く、師に勝れる人のなきにて知るべし。（「玉襷」による）

元文三年（一七三八）には江戸に下り、村田春道の家に寓居した。後に橘千蔭の父枝道という、歌を好む人の近く、北八丁堀に住んだ。この時より梅谷姓を廃し、もとの岡部姓に復した。

元文五年（一七四〇）には故郷に帰り、その旅を紀行文『岡部日記』として、また延享二年（一七四五）にも帰り、『後の岡部日記』として残している。このころより弟子も多く、小野古道・揖取魚彦・橘千蔭・平賀源内・本居舜庵・荒木田久老・藤原宇万伎などが名を連ねている。本居宣長も教えを受けたものとして知られている。

同三年（一七四六）、荷田在満の薦挙により、田安家（悠然公）に仕えることとなった。この頃『文意考』が成立した。

宝暦七年（一七五七）六月、『冠辞考』が成る。それについて『泊酒筆話』には次のように書かれている。

懸居翁江戸へ下られてより復古の学、これが為に一新し、冠辞考を刊布せられて、時人はじめて、古言の学と、いふことをわきまへたり。

また、本居宣長は賀茂真淵について『玉勝間』の中で次のように述べている。

かの冠辞考を得て、かへすくよみあぢはふほどに、いよくく心ざしふかくなりつゝ此大人をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年此うし、田安の殿の御事をうけ給はり給ひて此いせの国より、大和山城などにこゝかしこと尋ねめぐられし事の有しをり、此松坂の里にも、二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆしらで、後にきゝて、いみしくくちをしかりしをかへるさまにも、又一夜やどり給へるを、うかゞひまちて、いとくゝうれしく、いそぎやどりにまうでて、はじめて見え奉りたりき、さてつひに名簿を奉りて、教をうけ給はることにはなりたりきかし、

『冠辞考』により、宣長が感銘をうけたことがよくわかる。

同一〇年（一七六〇）、十月、『万葉考別記』が成立。同年十一月六日致士の身となる。

明和元年（一七六四）秋、浜町に移り住み、庭を田居のさまに作り、場所もいささか傍（カタヘ）であるので県居と号した。この頃『歌意考』成る。

同二年（一七六五）、『国意考』成る。

同五年（一七六八）、『祝詞考』成る。

同六年（一七六九）、二月、『語意考』が成立した。その後病気にかかり、同年十月三十日、永遠の眠りについた。言わば『語意考』は、真淵の辞世の句のごときものである。江戸の南荏原の郡品川の東海寺なる少林院の山上に葬られ、玄珠院真淵義龍居士とおくり名された。享年七十二歳であった。

二　『語意考』について

『語意考』には、次のような跋文がある。

いづこをはかともしらへぬ大うみの原をこぐふねも先つふな人の伝へのまに〳〵まかちとるからにおもふみなとにはつといへりあかすめらみ国の古ことを解にさある伝へをうしなひしゆあらしま風にあへるふねの行方もしらすなんなりにきしか有か中に山代の稲荷はふりか家に伝へし百たらすいつらのこゑのあといさゝか有をとりて荷田東万呂のうし千よろつの古言をかゝなへるによりて世人のいまたこゝろ得さりしことらを得てことゝふ人に伝へしをおのれもいさゝけはかり聞つこをたぎしとして終にいよゝしほの八百道行まとはさらんことを加へんとす猶おちなきかこはしも思ひかねかたきことさは也これかうへをまたくせんことはすみのえの大神のさちく

明和六年二月賀茂真淵かしるす

これによると、『語意考』を著した目的は、古言を解く指針となるべきものが失われた世に、荷田春満がそれを成し得たので、その教えを基として古言についての解釈を加えようとしたことになる。また、成立が明和六年（一七六九）、二月であったということが知られる。

内容は、まず最初に総論として一から四までの四条が記される。それらについて抜粋し、要点をまとめておく。

一・ひとつ

此の日いづる国はいつらのこゑのまに〳〵ことをなして、よろづの事をくちづからいひ伝へるくに也（1オ）

そも〳〵此国の上つ代より用来りて定め有ことばの分ちは、横の音にこそあれ、其一つはことはじむるこゑ、二つはことうごかぬこゑ、三つはこと動くこゑ、よつはことおふするこゑ、五つはことたすくるこゑ也、こを分ちしる時こそこゝの言は明らかなれ、（3ウ）（傍線筆者）

右の文に見られるごとく、まず、日本語はインドや中国と比較して、たった五十音のみで成立している簡潔さをたたえている。次に日本語の本来の「ことばの分ち」は横の音によるのであり、ア段を「はじむるこゑ」、イ段を「うごかぬこゑ」、ウ段を「動くこゑ」、エ段を「おふするこゑ」、オ段を「たすくるこゑ」と定義づけて呼ぶ。

二・ふたつ

日放国日の入国はたゞ音もていひ、此国は言を専らとして音は次とす（3ウ）

ここでは、中国・インドでは音に重きをおくが、我が国では言葉に重きをおくのだということをのべている。

三・みつ

音はいかにも有べく、猶正しきをよしとすとも四方の国人はえよくいはねばかひなし、それも君が御たからにして同しく仕へまつるかは、音などいさゝかなる事につけていやしむべからず、かゝれば、音はいふにたらぬ事也（6オ～6ウ）

ここでも、音より言葉の重要性をのべている。

四・四つ

此国人は心なほければ事も言も少くして、いふ事にまどひなく、聞て忘るゝことなし、言にまどひなければよく聞得、忘れざれば遠くも久しくも伝へ、民の心直ければ君が御のりもすくなし（8オ）

ここでも、二・三をうけて、文字がなくても不自由しないのが日本語の長所であることをのべている。

一～四に総論をのべているのだが、中心となるのは一で、日本語の優越性と、五十音図の利用による活用とを考えたところが本書の骨格となっているのである。

総論の次に、五十音図を次のように掲げている。

五十聯　伊門良之 ヨム 古恵と訓

阿伊宇延遠　本音
加幾久計己　清濁二音
佐志須世曽　同
多知門天登　同
奈仁奴禰乃　清音
波比不反保　清濁二音
麻美武米毛　清音
也伊由衣与　同
良利留例呂　半濁
和為宇恵於　清音
初体用令助（9ウ～10オ）

以下、これを其として各論をのべて行くのである。列挙すれば次のようになる。

○阿伊宇延袁は同行と和行とはいさゝか通はしいふ言あれど、加行より下のハ行に通ふことなし
○伊伊為、○延延恵、○袁於の別の事
○阿と於は言の下にいふ事なし
○良利留礼呂は言の上にいふ事なし
○言の始を濁ることなし
○横韻の事、五十音初、体、用、令、助の五つに分ちしるしたる事（動詞の変化の事）
○延言・約言
○転回通

○略言
○清濁を通はし言ふ例（「国語学書目解題」による）

このうち、「良利留礼呂は言の上にいふ事なし」と「言の始を濁ることなし」の二項目は、日本語の語頭には、元来、ラ行音と濁音が立つことのなかった事実を言った最初のものとして注目される。しかし、これらを特にとりたてて主張するつもりはなかったらしく、活用にかかわる横韻の説明の一つとしてあげていたのである。

「横韻の事」は、「初体用令助の五つを分ちしるせしことわり」から詳しい解説が記される。

○加左多奈波麻也良和を初の音と名づく
○幾志知仁比美伊利為を体音と名づく
○久須門奴不武由留宇を用音と名づく
○計世天祢反米衣例恵を令音と名づく
○袁己曽登乃保毛与呂於を助音と名づく

と命名する。「加左多奈……」は、いわゆる未然形のことである。「幾志知仁……」は、連用形が名詞に転ずることをもととして「体音」と命名し、まとめている。「久須門奴……」は、「幾志知仁……」が体言化するに対し、用言の働きをすることで「用音」とまとめる。これは、いわゆる終止形である。「計世天祢……」は、命令形。「袁己曽登乃……」は、助詞の役割をするものを「助音」と名づけたのだが、活用という点から言えば、除外されるべきものである。さすがに、真淵も説明の要をおぼえたらしく、「袁己曽登乃……」それぞれにふれているのだが、「己」「保」など見かけないものには「平言」だとして逃げざるを得ず、苦しい。五十音図を活用にすべて活かそうという気持がなせるわざだろうが、無理は否めないところである。

次に、「初言体言用言令言助言を二言にいふ類」であるが、ここでは加行から和行について各二文字の語をあげ、それぞれの活用形をあげている。すべてを五段活用としてとらえようとしたために和行は苦しい説明となっており、他の語についても、助言は「約」という用語を用いて強引に活用表を成立なさしめている。我々が疑問を抱く部分については、真淵も説明の要を覚えたらしいが、これもやはり苦しい。

「同九行を各三言にいへる類」は、各活用の表現になるもとの形を三文字の語をあげて説明している。これも二文字の語と同様、苦しい説明がなされている。

「延言約言」は「後世にはから国に反といふによりてかへしといへど、わが国には二言を約めて一言とし、一言を延て二言にいふことあれば、かへしとのみいひてはたらはざる也」とあり、たとえば約言として、

阿波宇美——→阿布美
登保都阿波宇美——→登保多布美

右のような例をあげ、説明している。納得できる例もあるが、次のように承服しがいたものもある。

夜は須我良尓といふは、夜は佐奈我良尓也、此左は志加の約なるを須に転し通はし、奈は須奈の約め佐となる故に、其佐に須はこめたる事上の良をこめしに同し、（22ウ）

この約言の最後の所に、

かくその言の本を尋ねて後より思ひ当る時はむつかしかれど、すべて打いへるがおのづから此五十聯音にかなふにぞある、既にもいへる如く天地のいはしむる言の国の妙なる也、（24ウ）

と結論している。結局五十音図にかなうことが日本語のすばらしい点であることを強調しているわけである。

「延言」についてであるが、冒頭に、

右の約言は、その言長くしていひつゞけ難き時に約めいひ、此延言は短くして其言ついでのわろき時延ていふにて、延言約言は事の表裏のみ也

とあり、延言と約言が表裏の関係であることを説明している。

見るすくなき→見良久少き

といった変移を延言というのである。

ところで、この延言の部分に、後の転回通の文が混入してしまっている。そして転回通の項に略言の内容が入ってしまっている。このために、この版本は筆者真淵の真意を伝えないものとなってしまったのである。

この誤りについては、松田好夫氏の『語意・書意』（岩波文庫）に詳しい。

「清濁を通はしいふ例」では、「波備夫便凡」の濁音を「末美武米母」の清音で言う。

須陪良芸←→須米良芸

「太治頭伝土も奈仁奴祢乃に通」うといい、

於杼礼←→於乃礼

などの例をあげる。

また「我芸愚解碁と良利屢例漏と通ふ」と言い、

和期←→和呂

などの例をあげる。

また、中国の字で見ると、「馬美武米母」は呉音で「まみむめも」、漢音で「ばびぶべぼ」、「儺尓砮禰廼」は呉音で「なにぬねの」、漢音で「だぢづでど」と通うことを記している。

さらに、清濁の言は、濁言には濁字を書き、清言には清音の字を書く所はあるが、清言に濁言の字を書くことはない、とのべている。

また、二言を言い続ける時に濁ることがあると言い、

やまかは→やまがは

うらひと→うらびと

という例をあげている。

音便にもふれ、

うれしき→うれしい

かなしく→かなしう

などの音便の例を、平言だとし、雅言には「うれしき」「かなしく」

と言うものだとのべる。

最後に、

此記には多くは古書の書る所を挙ぬはわづらはしければ也、挙ざるも皆より所有めり、見ん人思へ、又より所を挙るも一つ二つのみ挙てやみぬ、然ればその故よしこれに限れりと思ふことなかれ、

とまとめて『語意考』を了としているのである。

『国語学書目解題』には、

この書は、荷田家の古伝に基きて、五十音によりて、発音のこと、語の外形変遷のこと、語尾の変化等のことなどをのべたるなり、

とまとめてあるが、五十音図をもとにして日本語の優越性と、その特徴をのべたものが本書であると言ってよい。

ところで、この五十音図を基礎として活用について言及している本書に対し、周知の如く、谷川士清が『日本書紀通証巻一彙言』の付録中に「倭語通音」として、

倭語通音

	聲韻一體	韻未定	韻已定	韻告人	韻自言	
遇	ア	イ	ウ	エ	ヲ	自有二音韻一次序一
書	カ	キ	ク	ケ	コ	今借二態藝一十字一
指	サ	シ	ス	セ	ソ	以發二揮其義一但
立	タ	チ	ツ	テ	ト	首尾遇請ノ両韻
往	ナ	ニ	ヌ	子	ノ	取二通一音一非二正一義一
言	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	也蓋第一五之十一
産	マ	ミ	ム	メ	モ	韻皆非二雅一語一故
悔	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	詠一歌讀一書古今
斬	ラ	リ	ル	レ	ロ	不レ用レ之是自一然
請	ワ	井	ウ	エ	オ	之妙爾

と活用について記している。これについては、井上豊氏が「賀茂真淵の学問」（S18・八木書店）の中で次のようにのべておられる。

両者とも五十音図によって助動詞活用の法則を表示しようとした点は共通するが、説明のしかたにはかなり距りがあるのである。（中略）士清が真淵にまなぶことはありえても、真淵が士清の説をことわりなしに採用し、しかもこれを自家の創見としてほこるといふやうなことは想像できない。（中略）以上の諸点から、両説はもと〳〵独立になったものとかんがへられる。ことに真淵が士清の説をまねたといふやうなことは絶対にないと断言してよいとおもふ。たゞ活用形式を図表化したのは士清がさきかとおもふ

が、注釈書の例言に附載されたにすぎず、説をなしたのは真淵の方がさきで、かつ独立した語学書のの中心をなしてゐるのであるから、研究史上における意義といふ点からは、語意考の説に重点がおかるべきであろう。

このように、活用説については、真淵と士清の、先後関係は明らかにしえない。このような国語学上の大問題が放置されていることには驚きを感ずるが、いずれにせよ結論は今後の研究をまたなければならない。

もう一つは延約説であるが、語義の説明にこのような考え方をとりいれたのは本書が最初であり、後の国語学者に大きな影響を与えたことも特記すべき事項であると言えよう。（本学助教授）

本稿は、59年度国内研修員として、筑波大学に留学させていただいた折、研究した種々の項目の中の一つである。

参考文献

○国語学研究事典
○国語学大系
○語意考の成立過程を示す二三の伝本について（笹月清美「文学研究」第二十六輯）
○国語学史（三木幸信他）
○語意・書意（松田好夫・岩波文庫）
○版本『語意考』の復原（国語国文研究第二・三輯）
○国語学書目解題
○賀茂真淵の学問（井上豊・八木書店）
○賀茂真淵の人と思想（荒木良雄・厚生閣）
○賀茂真淵の業績と門流（井上豊・風間書房）
○国学者伝記集成

なお、版本調査の際、東大図書館・研究室、学習院大図書館、宮内庁書陵部の方々には多大なる恩恵をこうむった。ここに記して感謝の念を表したい。